

二〇二三年度 第二回 入学試験問題

国語 (50分)

〈注意〉

- (一) 開始のチャイムが鳴るまで、この冊子を開いてはいけません。
- (二) 問題は1ページから33ページに印刷されています。
- (三) 受験番号と氏名は解答用紙の定められたところに記入しなさい。
- (四) 解答はすべて解答用紙の定められたところに記入しなさい。

受験番号		

I

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

突然だが、^(a)ニチジョウ的にはよく使うけれど立ち止まって考えられることのほとんどない、とある言葉を取り上げるところから始めたいと思う。

その言葉とは「贅沢」である。

① 贅沢とはいったいなんだろうか？

まずはこのように言えるのではないだろうか？ 贅沢は不必要なもの関わっている、と。必要の限界を超えて支出が行われるとき、人は贅沢であると感ずる。^(A)豪華な食事がなくても生命は維持できる。その意味で、豪華な食事は贅沢と言われる。装飾をふんだんに用いた^(b)イルイがなくても生命は維持できる。だから、これも贅沢である。

贅沢はしばしば非難される。人が「贅沢な暮らし」と言うとき、ほとんどの場合、そこには、^(c)カドの支出を非難する意味が込められている。必要の限界を超えた支出が無駄だと言われているのである。

だが、よく考えてみよう。たしかに贅沢は不必要と関わっており、^(B)それは非難されることもある。ならば、人は必要なものを必要な分だけもって生きていけばよいのだろうか？ 必要の限界を超えることは非難されるべきことなのだろうか？

おそらくそうではないだろう。

必要なものが十分にあれば、人はたしかに生きてはいける。^(C)、必要なものが十分あるとは、必要なものが必要な分しかない、ということでもある。⁽²⁾十分とは十二分ではないからだ。

必要なものが必要な分しかない状態は、リスクが極めて大きい状態である。何かのアクシデントで必要な物が損壊してしまえば、すぐに必要のラインを下回ってしまう。だから必要なものが必要な分しかない状態では、あらゆるアクシデントを排して、必死で

現状を維持しなければならない。

これは豊かさからはほど遠い状態である。つまり、必要なものが必要な分しかない状態では、人は豊かさを感じることができない。必要を超えた支出があつてはじめて人は豊かさを感じられるのだ。

したがつてこうなる。必要の限界を超えて支出が行われるときに、人は贅沢ぜいたくを感じる。ならば、人が豊かに生きるためには、贅沢ぜいたくがなければならぬ。

とはいえ、これだけでは何か③しつくりこないと思う。

お金を使いまくったり、ものを④スてまくったりするのはとてもいいことだとは思えない。必要を超えた⑤ヨブンが生活に必要なということは分かるし、それが豊かさの条件だということも分かる。だが、だからといって贅沢ぜいたくを肯定するのはどうなのか？

このような疑問は当然だ。

この疑問に答えるために、ボードリヤールという社会学者・哲学者てつがくしゃが述べている、浪費ろうひと消費の区別に注目したいと思う。贅沢ぜいたくが非難されるときには、どうもこの二つがきちんと区別されていないのだ。

浪費とは何か？ 浪費とは、必要を超えて物を受け取ること、吸収することである。必要のないもの、使い切れないものが浪費の前提である。

浪費は必要を超えた支出であるから、贅沢ぜいたくの条件である。そして贅沢ぜいたくは豊かな生活に欠かせない。

浪費は満足をもたらす。理由は簡単だ。物を受け取ること、吸収することには限界があるからである。身体的な限界を超えて食物を食べることはできないし、一度にたくさんさんの服を着ることもできない。つまり、浪費はどこかで限界に達する。そしてストップする。

人類はこれまで絶えず浪費してきた。どんな社会も豊かさをもとめだし、贅沢ぜいたくが許されたときにはそれを享受した。あらゆる時代において、人は買い、所有し、楽しみ、使った。「未開人」の祭り、封建領主ほうけんの浪費、一九世紀*ブルジョワの贅沢……他にもさま

さまざまな例があげられるだろう。

しかし、人類はつい最近になって、まったく新しいことを始めた。それが消費である。

浪費はどこかでストップするのだった。物の受け取りには限界があるから。しかし消費はそうではない。消費は止まらない。消費には限界がない。消費はけっして満足をもたらしさない。

なぜか？

消費の対象が物ではないからである。

人は消費するとき、物を受け取ったり、物を吸収したりするのではない。人は物に付与された観念や意味を消費するのである。

ボードリヤールは、消費とは「観念論的な行為」であると言っている。^④消費されるためには、物は記号にならなければならない。記号にならなければ、物は消費されることができない。

記号や観念の受け取りには限界がない。だから、記号や観念を対象とした消費という行動は、けっして終わらない。

たとえばどんなにおいしい食事でも食べられる量は限られている。腹八分目という昔からの戒めを破って食べまくったとしても、食事はどこかで終わる。いつもいつも腹八分目で質素な食事というのはさびしい。やはりたまには豪勢な食事を腹一杯、十二分に食べたいものだ。これが浪費である。浪費は生活に豊かさをもたらす。そして、浪費はどこかでストップする。

それに対し消費はストップしない。たとえばグルメブームなるものがあつた。雑誌やテレビで、この店がおいしい、有名人が利用しているなどと宣伝される。人々はその店に殺到する。なぜ殺到するのかというと、だれかに「あの店に行ったよ」と言うためである。

当然、宣伝はそれでは終わらない。次はまた別の店が紹介される。またその店にも行かなければならない。「あの店に行ったよ」と口にしてしまった者は、「ええええ？ この店行ったことないの？ 知らないの？」と言われるのを嫌がるだろう。だから、紹介さ

れる店を延々と追い続けなければならない。

これが消費である。消費者が受け取っているのは、食事という物ではない。その店に付与された観念や意味である。この消費行動において、店は完全に記号になっている。だから消費は終わらない。

浪費と消費の違いは明確である。消費するとき、人は実際に目の前に出てきた物を受け取っているのではない。これは*モデルチェンジの場合と同じである。なぜモデルチェンジすれば物が売れて、モデルチェンジしないと物が売れないのかと言えば、人がモデルそのものを見ていないからである。「チェンジした」という観念だけを消費しているからである。

ボードリヤール自身は消費される観念の例として、「個性」に注目している。今日、広告は消費者の「個性」を煽り、消費者が消費によって「個性的」になることをもとめる。消費者は「個性的」でなければならないという強迫観念を抱く（いまの言葉ではむしろ「オンリーワン」といったところか）。

問題はそこで追求される「個性」がいったい何なのかがだれにも分からないということである。したがって、「個性」はけっして完成しない。つまり、消費によって「個性」を追いつめるとき、人が満足に到達することはない。その意味で⑤消費は常に「失敗」するように仕向けられている。失敗するというより、成功しない。あるいは、到達点がないにもかかわらず、どこかに到達することがもとめられる。こうして選択の自由が消費者に強制される。

消費社会を相対的に位置づけるために、それとは正反対の社会を紹介しよう。ボードリヤールも言及しているが、人類学者マーシャル・サーリンズは「原初のおふるる社会」という仮説を提示している。これは現代の狩猟採集民の研究を通じて、石器時代の経済の「豊かさ」を論証したものである。

狩猟採集民はほとんど物をもたない。道具は貸し借りする。計画的に食料を貯蔵したり生産したりもしない。なくなったら採りにいく。無計画な生活である。

彼らはしばしば、物をもたないから困窮していると言われる。そして、それは彼らの「未来に対する洞察力のなさ」こそが原因で

あると思われる。つまり、計画的に貯蔵したり生産したりする知恵がないために十分に物をもっていないとして、「文明人」たちから憐れみの目で眺められている。

しかし、これは実情から著しくかけ離れている。彼らはすこしも困窮していない。⑥狩猟採集民は何ももたないから貧乏なのではなくて、むしろそれ故に自由である。「きわめて限られた物的所有物のおかげで、彼らは日々の必需品に関する心配からまったく免れており、生活を享受しているのである」。

また、彼らが未来に対する洞察力を欠き、貯蓄等の計画を知らないのは、知恵がないからではない。彼らのような生活では、単に未来を思い煩う必要がないのだ。

狩猟採集生活においては少ない労力で多くの物が手に入る。彼らは何らの経済的計画もせず、貯蔵もせず、すべてを一度に使い切る大変な浪費家である。だが、それは浪費することが許される経済的条件のなかに生きているからだ。

したがって狩猟採集民の社会は、一般に考えられているとは反対に、物があふれる豊かな社会である。彼らが食料調達のために働くのは、だいたい一日三時間から四時間だという。サーリンズは、農耕民に囲まれていたけれども農業の採用を拒否してきた、ある狩猟採集民のことを紹介している。なぜ彼らは農業の採用を拒んできたのか？「そうならばもつとひどく働かねばならない」からだそうである。

もちろん狩猟採集民をカドに理想化してはならない。狩猟採集民もうまく食料調達ができないことはあるが、環境の変化によって容易に困窮に陥ることはある（しかし、農耕民の方がその可能性が高いとも言えるのだが……）。

重要なのは、彼らの生活の豊かさが浪費と結びついているということである。彼らは贅沢な暮らしを営んでいる。これが重要である。ポードリヤールやサーリンズも言うように、浪費できる社会こそが「豊かな社会」である。将来への気づかいの欠如と浪費性は「真の豊かさのしるし」、贅沢のしるしに他ならない。

消費社会はしばしば物があふれる社会であると言われる。物が過剰である、と。しかしこれはまったくのまちがいである。サーリ

ンズを援用しつつボードリヤールも言っているように、現代の消費社会を特徴づけるのは物の過剰ではなくて稀少性である。消費社会では、物がありすぎるのではなくて、物がなさすぎるのだ。

なぜかと言えば、商品が消費者の必要によってではなく、生産者の事情で供給されるからである。生産者が売りたいと思う物しか、市場に出回らないのである。消費社会とは物があふれる社会ではなく、物が足りない社会だ。

そして消費社会は、そのわずかな物を記号に仕立て上げ、消費者が消費し続けるように仕向ける。消費社会は私たちを浪費ではなくて消費へと駆り立てる。消費社会としては浪費されては困るのだ。なぜなら浪費は満足をもたらしてしまふからだ。消費社会は、私たちが浪費家ではなくて消費者になつて、絶えざる観念の消費のゲームを続けることをもとめるのである。⑦消費社会とは、人々が浪費するのを妨げる社会である。

消費社会において、私たちはある意味で我慢させられている。浪費して満足したくても、そのような回路を閉じられている。しかも消費と浪費の区別などなかなか思いつかない。浪費するつもりが、いつのまにか消費のサイクルのなかに閉じ込められてしまう。この観点は極めて重要である。なぜならそれは、質素さの提唱とは違う仕方での消費社会批判を可能にするからである。

しばしば、消費社会に対する批判は、つましい質素な生活の推奨を伴う。「消費社会は物を浪費する」「人々は消費社会がもたらす贅沢に慣れてしまつている」「人々はガマンして質素に暮らさねばならない」。日本でもかつて「清貧の思想」というのが流行つたがまさしくこれだ。

そうした「思想」は根本的な勘違いにもとづいている。消費は贅沢などもたらさない。消費する際に人は物を受け取らないのだから、消費はむしろ贅沢を遠ざけている。消費を徹底して推し進めようとする消費社会は、私たちから浪費と贅沢を奪っている。

しかも単にそれらを奪っているだけではない。いくら消費を続けても満足はもたらされないが、消費には限界がないから、それは延々と繰り返される。延々と繰り返されるのに、満足がもたらされないから、消費は次第に過激に、過剰になつていく。しかも過剰になればなるほど、満足の欠如が強く感じられるようになる。

これこそが、二〇世紀に登場した消費社会を特徴づける状態に他ならない。

⑧ 消費社会を批判するためのスローガンを考えるとすれば、それは「贅沢をさせる」になるだろう。

【注】

*ブルジョワ……資本や財産があり、労働者を使って事業をしている人たち

*モデルチェンジ……製品の性能を向上させたりデザインを変えたりすること。一般には、自動車の型式変更のこと

【問1】

—— a) e) のカタカナを漢字に改めなさい (楷書で、ていねいに書くこと)。

- a) ニチジョウ
- b) イルイ
- c) カド
- d) ステ
- e) ヨブン

【問2】

—— ① 「贅沢とはいったいなんだろうか？」とあるが、一般に、贅沢なお金の使い方を表す次の慣用句について、
□□□□ にあてはまる言葉を漢字2字で書きなさい。

金を□□□□ のように使う。

【問3】

A ～ C

に当てはまる語として適当なものを、次の中からそれぞれ選び、(ア) ～ (オ) の記号で答えなさい。
ただし同じ記号を2度以上用いてはいけないものとします。

- (ア) しかし (イ) ところで (ウ) たとえば (エ) すなわち (オ) だからこそ

【問4】

②「十分とは十二分ではない」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 必要なものがそろっていないくとも、人々は日々ひとびとのささいな幸せを通して豊かさを感じられるので、あり余るほどの量を蓄える必要はないということ。

- (イ) 必要なものがそろっていれば生きてはいけるが、それだけでは豊かさを感じることはできず、精神的な豊かさの条件を満たす必要があるということ。

- (ウ) 必要なものが十分な量そろっていても、質が悪いものに囲まれているのは豊かさは感じられないため、質の良いものに囲まれることが大切だということ。

- (エ) 必要なものがそろっているだけでは備えとして不十分な状態であり、ものが余るほどたくさんあってこそ、はじめて人は豊かさを感じられるということ。

【問5】

③「しっくりこない」とありますが、ここではどのようなことを意味しますか。次の中から最も適当なものを選び、(ア) ～ (エ) の記号で答えなさい。

- (ア) 言い過ぎだ (イ) 納得しがたい (ウ) 都合がよすぎる (エ) はっきりしない

【問6】

④「消費されるためには、物は記号にならない」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

筆者は、「消費」と「浪費」について次のように説明しています。まず、「浪費」について考えてみましょう。たとえば、非常に高価な食べ物が毎日食卓に並んでいたとしても、

- (1) (ア) 食べたり飲んだりできる量には限界があります
 (イ) おいしさに慣れると満足できなくなりがちです
 (ウ) 食べ過ぎが続くと健康を害することがあります
- 。これが、「浪費」の性質です。

次に、「消費」について、服を例に考えてみましょう。去年流行した服は、今年を着られないと考える人々がいます。

- その理由は、(2)
- (エ) 去年の服が、ひどく傷んでしまったからです
 (オ) 去年の服には、思い出がたまっているからです
 (カ) 去年の服は、もうおしゃれには見えないからです
- 。

これが、服を「記号」として消費するということです。つまり、人々が消費しているのは、

- (3) (キ) その服のデザインではなく、その服の持つ着心地や肌触りなのです
 (ク) その服の素材ではなく、その服に関わってきた人々の記憶なのです
 (ケ) その服の品質ではなく、その服に対して人々が抱くイメージなのです
- 。

そのため、翌年「新たな流行」が生まれれば、また新たな服を購入してしまうでしょう。つまり、

- (4) (コ) 物を「記号」として消費する時に、人々が完全に満足することはありえないのです
 (サ) 満足できる「記号」を手に入れるため、より質の高い物を消費しようとするのです
 (シ) つねに新たな「記号」を追い求めることで、賢い消費者であろうと努力するのです
- 。

【問7】

——⑤「消費は常に『失敗』するように仕向けられている」とありますが、どういふことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 現代の大量消費社会は巨大企業の思惑どおりに動いており、人々は企業の計算どおりに行動してしまつたため、人々が自分の意志で決められることはないといふこと。

(イ) 現代の大量消費社会では、多くの企業が自社の製品を長持ちしないように作つてゐるため、人々は新しいものを次々に購入しなければならなくなつてゐるといふこと。

(ウ) 現代社会において人々は新しいものを手に入れたがるが、その新しさはすぐに失われてしまつたため、新たな新しさを追い続けなければならなくなつてしまつたといふこと。

(エ) 現代社会では、人々は個性的になりたいと思つたが、人間である限り誰にも同じような人間らしさが備わつてゐるため、どれだけ努力しても個性的にはなれないといふこと。

【問8】

——⑥「狩猟採集民は何ももたないから貧乏なのではなくて、むしろそれ故に自由である」とありますが、どういふことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 狩猟採集民の生活は、いま目の前にあるもので成り立っており、日々の必需品の欠乏をおそれる必要がないため、さまざま不安や心配を抱えずにすむといふこと。

(イ) 狩猟採集民の生活では、好きな時に住居を移動できるため、自分が所属する村の人々との人間関係に日々心を悩ますことなく、思うままに生きていけるといふこと。

(ウ) 狩猟採集民は、生活を今よりも進歩させたいといふ欲望がなく、快適で便利な生活様式にあこがれを持つことがないため、自分たちの生活を守り通せるといふこと。

(エ) 狩猟採集民は、その日暮らしの生活をしているため、先のことを考えて準備するという習慣がないからこそ、いまこの瞬間しゆんかんを生きることに成功しているということ。

【問9】

⑦ 「消費社会とは、人々が浪費らまひするのを妨さまたげる社会である」とありますが、どういうことですか。次の説明文の a ～ f に当てはまるものを後の (ア) ～ (カ) より選び、それぞれ記号で答えなさい。

筆者は、消費社会とは、人々が浪費するのを妨げる社会だと言います。これはどういうことでしょうか。まず、消費社会では一見、a が大量に供給されているように見えます。しかし、実は b が供給されているに過ぎないと筆者は言います。人々が必要とする物を「浪費」することで満足できるなら、c になりませんが、実際は、人々は消費社会の中で、「消費」しつくすことができない物に囲まれながらも d を抱え続ける状態におかれています。

このような状態になる理由を、有名なレストランを例に考えてみましょう。町のレストランのシェフがコンテストで優勝したり、そこに有名人が訪わづれたりすると、この店に行きたいと思う人々が増えます。なぜなら、人々が求めているのは、e だからです。人々を消費に向かわせるのは、企業きぎやうによる宣伝だけではありません。SNSが普及ふきやうした現在では、誰だれもが情報を発信すること、人々に消費を促うながしています。この点で、消費者もまた消費社会の作り手になっていると言えるでしょう。このように、消費社会とは、人々が f で成り立つ社会なのです。

- (ア) 商品に付与ふよされた意味や評判
- (イ) 消費する側の必要とする商品
- (ウ) さらに何かを手に入れたい欲望
- (エ) 豊かな生活を送っていること
- (オ) 「満足」を追いかけて続けること
- (カ) 生産する側が売りたいと思う商品

【問10】

——⑧「消費社会を批判するためのスローガンを考える」とすれば、それは「贅沢をさせる」になるだろう」とありますが、これに関する次の説明文の(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

筆者が、「消費社会を批判するためのスローガン」として「贅沢をさせる」と主張する理由を考えてみましょう。
 これまでは、消費社会を批判する際に、

- (1) (ア) 人々が無駄遣いをせずに、各人の欲望を抑えて簡素な生活を送ること
 (イ) 人々が節約を心がけつつも、たまには各自の欲望どおりに生きること
 (ウ) 人々が精神力を鍛え上げて、どんな欲望にも打ち勝つようになること

が求められてきましたが、これ

は消費社会の批判にはなっていないと筆者は考えています。なぜなら、そうした行動をとっても消費している限り、

- (2) (エ) 人々は自身の生きる意味を見出せず、お金を稼いでも消費できなくなる
 (オ) 人々は満たされることがなく、さらなる満足を求めて消費を加速させる
 (カ) 人々は節約を心がけて生活するので、日用品の消費が変わることはない

からです。

ここから、消費社会のサイクルから抜け出すために、「贅沢をさせろ」という筆者の主張について、私たちなりに考えてみましょう。消費社会で人々に消費を促すものは、広告などを通じて与えられたイメージや、最近ではSNSに載っている〈映える〉写真でしょう。〈映える〉写真が撮れる店で食べもしないスイーツを消費する人々は、もはや自身も消費社会の中で、人々に消費を促す側に回っているのです。こうした消費社会から抜け出すには、

- (3) (キ) 自身の欲望が、他者によって作り上げられたものであることを自覚すること
 (ク) 自ら欲望の存在を否定し、欲のない人間として生きていこうと決意すること
 (ケ) 自身を発信する側として、欲望をコントロールしようとする意志を持つこと

が重要です。

ここでさらに必要となるのが「贅沢」です。心ゆくまで「浪費」し、思う存分「贅沢」をするとき、人々は満足を覚えることとなります。

すなわち、「贅沢」によって人々は、(4)

- (コ) 自分自身のイメージに満足できるようになる
- (サ) 自身の欲望のあり方に向き合えるようになる
- (シ) 自分と他人の関係について考えるようになる

のです。

人々は贅沢をすることで、終わらない消費のサイクルを見つめ直すことにつながります。終わりのない消費社会を乗り越えるには、質素な生活をして「贅沢を止める」ことではなく、「贅沢をする」必要があるのです。

【問11】 本文における内容と合致しないものを、次の中から2つを選び、(ア)～(カ)の記号で答えなさい。

(ア) 消費社会においては、浪費と満足をつなげる回路が閉じられているため、人々が浪費することで満足することは難しい。私たちは、気がつけば消費サイクルの中にいるのである。

(イ) 人類は長い歴史の中で、どんな社会においても豊かさを求め、可能ならば浪費してきた。しかし、最近になって人々は、決して満足をもたらしことがない消費を始めたのである。

(ウ) 浪費と消費の区別ははつきりとしており、人々はこの区別に従って浪費をするか消費をするか決定できる。しかし、一度消費してしまうと、浪費するための回路は閉じられてしまう。

(エ) 浪費することが習慣化されたため、人々は浪費のもたらす満足を認識できなくなった。その結果、人々は必要以上のものを消費することで満足を得ようと努力するようになったのである。

(オ) 狩猟採集民は一日に三時間から四時間ほどしか働いていないという。サーリンズによると、狩猟採集民の中には働く時間が増えるために生活に農業を取り入れることを拒否したものもいる。

(カ) 人々は広告を見ることで、自身は「個性的」であらねばならないという強迫観念を抱くようになる。しかし、「個性」の実態が明らかでないために、人々の「個性」が完成することはない。

II

次の文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

以下は、昭和12年から13年にかけて、少女雑誌『少女の友』に連載された小説の一部分です。――時代は昭和の初期、舞台は横浜のミッシヨンスクール。新しい年度が始まって間もなく、新入生の大河原三千子は、二人の美しい上級生から手紙をもらいました。五年生の八木洋子からの手紙、そして四年生の克子からの手紙。それらは、「エス」の関係を結ぼうと、三千子に誘いかける手紙だったのです。「エス」とは、姉妹のような親密な間柄のこと。その後、大雨の日に、洋子の家の自動車に乗せてもらったことがきっかけで、三千子は洋子と「エス」の関係となり、洋子を「お姉さま」と慕うようになったのでした。

寶石でも降って来そうな、美しい晴天。

プログラムは予定通り進んで、いよいよ四年生の買い物競走――滑稽な余興みたいなレエスなので、人気がある。

スタアト・ラインから、五十米のところに、封筒が置いてある。その先き五十米のところに、大きいメモが畳んである。第一の封筒には、八百屋、魚屋、肉屋、炭屋、パン屋などと、それぞれ買い物の範囲が指定してあるので、それに従って、第二のメモのところで、例えば八百屋の封筒に当たった者は、大根、人参などと書いた、メモを捜し出す。そこで、なかなか①手間取る。走るのばかり早くても、買い物の仕方が下手なら勝てない。

見物席は、競走者のあわてた捜し振りに、②気がもめるやら、可笑しいやらで、

「早くウ……。魚屋さんがもう駈け出したわよオ。落ちついてエ。」

③腹をよじつて、きゃっきゃつ笑いながら、それでも赤組は赤、白組は白へ、銘々自分の味方の応援は忘れない。

封筒とメモの合った者が、ほっとして駈け出すと、また五十米先きに、今度は品物がある。炭屋は切炭の入った籠。魚屋は鯛や鮭の絵。そして、パン屋は、小麦粉と書いた、砂のつまった袋を抱えて行くのだ。

つまり、全レースは二百米だけれど、その途中に三度、関所みたいなものがあるので、見物は面白い。

五十米の封筒まで、一番に駆けつけた者が、百米のところ、八百屋のメモを捜すうちに、どん尻になり、百五十米の品物では、三番に食い込み、最後の五十米の走路で、四番に落とされる——という風に、変化があつて、おしまいまで興味を持たせる。

「さっきの八百屋さんの恰好、人参や菜っ葉を、なにもあんなに、大事そうに抱えこまなくたってねエ。おかしかったわ。」

「炭屋さんは、案外スマートだったわね。籠だけ提げればいいんですもの。」

生徒たちは、こんな競走の場合にさえ、スタイルのよし悪しが、かなり気にかかる。いくら一等になつても、変な恰好で駆けたのは、余り褒めない。

父兄席では、不断学校へ参観に来たこともないお父さんや、余り日光に当たつたことのないお母さん達が、^④わが子の姿を目で追いつながら、お互いに、よその子供の、褒めつこの競争をしている。

今、スタートを切つたのは、B組——克子も入っている、三番目の一組。

決勝点の横の天幕には、赤十字の旗が翻っている。

そのなかには、衛生係のマダムが三人、校医、看護婦、五年の赤十字班五人、洋子も腕に赤い十字のマークをつけて、グラウンドを見物している。

陽に負けて、頭痛を訴える生徒に手当して、教室へ連れて行つたり、一等の旗を掴むと同時に、脳貧血を起こした生徒を、担架に載せたり、洋子は凛々しく働いて、この秋日和に汗ばむくらい——。

誰かが耳もとで囁くように、

「今度の組は、克子さんも入ってるわ。」

「そう?」

洋子はなにげなく答えながら、やはり心にかかつて、天幕の外へ出て見た。

さすがに克子は、第一の封筒も、真先きに駈けつけて開いた。その次のメモも、素早く買いいものを選び取った。後は品物を持つたけだ。

⑤ そのあざやかな競走振りに、見ている洋子も胸がすくようで、日頃のことでも忘れ、やはり克子に勝たせたい。

洋子がそう思わなくとも、当然一等にちがいない克子——百五十米を、先頭切って駈けて行く。

しかし、直ぐその後から、二人、懸命に追ってくる。あつ、三人が **A** 迫ってくる。あつ、三人が **B** に並んだ。

と思う間もなく、克子は、パン屋の袋につまづいて、前にのめつた。続いて、一人、また一人、克子の上に折り重なって倒れた。

しいんと、不気味なものが、運動場全体に拡がるような瞬間——。

その間にも、後から来た幾人かは、品物を抱えて、決勝点へ駈けて行く。けれど、倒れた克子は動かない。

「行ってみましょう。」

赤十字の洋子達は、はっと顔見合わせて、天幕から、**C** 駈け出した。

近づいて見ると、後から転んだ二人は、もう塵を払って、歩き出した。けれど、下敷きになった克子は、ひとりでは起き上がれな

い。

洋子が肩を抱いて、

「どうしたの？ さあ、つかまってる。」

と、うつ伏した克子の顔を、覗いた時である。

「あら、血が、大変よ。」

看護婦も手伝って、克子は、直ぐ担架で運び去られた。

そして一方、もう次の組のスタートが切られた。少し血のついた小麦粉の袋は、整理員の手で、無造作に並び替えられた。

この手早い処置のために、見物席の人々は余り気にしないで、次の競技に笑い興じている。

しかし、赤十字の天幕テントのなかは――。

克子の鼻血はなぢを拭ふいたり、額の傷けがを消毒したりしている看護婦に、

「ことによると、肋骨ろっこつをどうかしているかもしれん、ひどく胸むねを打ったから。」

と、校医がくいが囁ささやいて、診察しんさつを続けた。

マダムの顔色かおいろが変った。一人が医務室へ飛んで行つた。

目立たぬように、天幕の裏口から、克子は担架たんかのまま、校舎の内へ移された。マダムや洋子が附つき添そって――。

グラウンドの赤十字の天幕が、急いそにからっぽになるといふことは、なにか不吉ふきつな出来事を、人に感じさせる。折角せつかくの晴れの日に、来賓らいひんまで心配させては悪いので、校医は応急の処置を取り、しばらく安静を命じておいて、一先ひとまず天幕へ戻もどった。マダムも代る代る見舞みまうことにして、洋子一人をそこに残すと、やはり出て行つてしまった。

今は傷ついた克子と、赤十字の洋子と、二人つきりで……。

灰色かゐの、飾かざりのない部屋。運動場の花やかなどよめきが聞えて来るので、尚なほ寂さびしい。

あんなに外は美しい日なのに、このなかは薄うすら冷たい秋。

⑥ 古い壁かべの隙間すきまから、こおろぎでも飛び出しそう――。

洋子は、たった今の悪夢あくむのような、ほんの一瞬いつしんの出来事を、思い返してみる。

「どう、まだ痛いのか？ 少しお寝やすみになれないかしら？」

と、やさしい言葉をかけてみても、克子は答えない。

額はほつたい縞帯はうたいに巻かれ、胸に氷をあてている。少うし浅黒かがやく輝くような顔色が、白っぽく青い。

勝気な輪郭りんかくで、いつも派手に匂におう唇くちびるも、ぱさぱさと紙のように乾かわいている。

「心配なさらなくても、大丈夫よ。ねえ、眼をつぶってよ。少しお眠りになると、お元気が出てよ。眼をあいてちゃ、いけないの。」しかし、克子は虚ろな眼を、大きく見開いて、天井をみつめたつきり……。

「やっぱり、こんなに怪我してまでも、気の強い克子さんは、あたしを、敵視してらっしゃるのかしら？　あたしに介抱されるのが、くやしいのかしら？」

と、洋子は思つて、椅子にそつと腰をかけた。

近くの木の葉に、風の音が時雨のようで、窓を微かに叩いて散る葉もある。

「眼をつぶってよ。」

今度は克子も、物憂そうに瞼を合せると、うとうとしはじめたようだ。

熱のためかもしれないけれど、柔かい血の色が、ほのぼのと頬に浮き出した。いつもの克子とは、別人のよう……。

綺麗だが、頼りない。

マダムと受け持ちの先生が入つて来た。

「どなたか、お宅から来ていられるんでしょうね。八木さん、父兄席へ行つて、お宅の方がいらしたら、お連れして下さい。」

洋子は駆け出すと、一年の控え所へ行つて、三千子を捜した。

ちようど、競技の終わったばかりらしい三千子は、ジャケツツを肩にかけて、足を揉みながら、休んでいるところだったが、

「あらア、お姉さま、くやしいのよ、二着。上手に転んで、お姉さまに看護して貰おうかしらと思つてるうちに、スタートを、しくじっちゃったの。駆け出すと夢中で、お姉さまのこと忘れちゃつて、転びぞこなつたし、二着だし、三千子つまないわ。」

と、明るく甘えて来たが、

「まあ、お姉さまの冷たい手。どうしたの。なにか御用？」

「ええ。あのね、克子さんが、さっきの面白い物競走で、お怪我したの。お家の方がいらしてたら、病舎へお連れしたいから、一緒に

捜して——。三千子さん、軽井沢で、克子さんのお家の方、知ってるわね。」

三千子も、洋子の様子にただならぬものを感じると、黙ってうなずいた。

「それからね、三千子さんが傍にいてあげたら、きつと克子さんも、喜ぶと思うの。」

「ええ。」

洋子の温い思いやりが、細かい心づくしが、三千子の胸にしみた。

「お怪我ひどいの。」

「ううん。だけど、怪我よりも後で肋膜炎を悪くしたりすると困るって——。胸を打ったから、心配らしいわ。」

二人は不安に追い立てられるように、見物席を廻って歩いた。

こうして捜している間にも、克子が急に悪くなって、あの寂しい部屋で、死ぬんじゃないかしら。そんな恐怖まで、心の底を通る。

「いらした、いらした、あすこの裁縫室の前とこ。お母さまよ。お呼びして来るわね。」

と、三千子は人垣を分けて、急いで行った。

洋子は、あたりの賑かな人声のなかに、ほんやり立っていた。自分ひとりの胸の言葉を聞くように……。

今まで自分のしていたこと——三千子を自分一人の妹のように、思いきめて、楽しかった、その独占欲のひそかな喜び。克子に勝っているという内心の誇り。

それを洋子は、反省してみる。

洋子は克子を敵にする気はなくなっても、克子にしてみれば、負けた、口惜しい、勝ちたいで、それが克子の心を、どんなに意地悪くしていったことか……。

この春から、なにかと洋子に突っかかって来た克子——それが洋子に思い出されて、自分も悪かったと、今更悔まれる。

「お姉さま。」

と、三千子が、克子の母をつれて、そこへ戻つて来た。運動会もそろそろ終りの方らしく、赤い風船が幾つもの、高い空を泳ぐように昇つてゆく。

「……三千子さん？ 三千さんも来ていて？」

克子が静かに眼を開いた。

もうしばらく休んで、自動車で病院へ移るときまわって、先生方は部屋を出て行った。傍に残ったのは、克子の母と、洋子だけ——。壺に挿した菊の花と、軽い膝掛けを、マダムの使いが持つて来た。

「三千子さん、いらつしやるの？」

と、克子は低い声で、また母に尋ねた。

三千子は上着やお弁当箱を取りに教室へ行っていた。今度は洋子も電話をかけたに立って、そこにいなかった。

「三千子さん、今までいらつしたけれど、ちよつと……。直ぐ戻つてらつしやるでしょう。それより、もう一人の、五年の上品な方が、そりゃ御心配下さつて、お母さまを捜してくれたり、三千子さんをここへ連れて来たり、マダムにね、花までおねだりして下さいですよ。お母さまは、ちよつとお茶をいただいでいて、克子の怪我したのも知らなくて、その方達に、いろいろお世話になつたらしいのよ。」

「そう。」

克子はそのまゝ眼を閉じたが、目尻にぼつたり涙が浮んで来て、

⑦ 体の具合が悪いと、なんだか気持ち澄むわね。私、怪我してよかつたと思うくらいなの。ねえお母さま……。と、しみり話し出そうとしたところへ、洋子が看護婦と一緒に迎えに来た。

「あの、お車が参りましたわ。」

克子は抱えられるようにして、自動車へ入る時に、腰を支えてくれる、洋子の白く長い指を、じいっと見ていた。

「御一緒に行つてあげて！」

と、洋子は三千子の耳に囁いて、そっと、車の中へ押し入れた。

そうして、玄関と教室とを行ったり来たりして、洋子は克子の荷物などを、すっかり運んでくれた。

「お大事にね。」

車が動き出してからも、気づかわしそうに立っていた。

病院へ着いて間もなく、レントゲン室へ運ばれて行くとして、

「今度は、三千子さんが、あたしの **D** の番をして下さる？」

と、振り返つて微笑んだ。

三千子の気を引き立てるために言ったのだろう。しかし、三千子はどきんとした。

—— 軽井沢で熱を出した、三千子の枕元にくれて、三千子の **D** にまで、妬みを見せたほどの、克子の激しい愛情

……。克子がこんなになつたのは、なんだか自分のせいのような気がする。

詳しい診察の結果、右肺強打、急性肋膜炎になるおそれがある。額の傷も、二針縫つた。

夕方から、またひどく熱が上がって、白い繃帯の下の顔は、目立って痩せたよう——。

「三千子さん、いる？」

熱に浮されながら、時々呼ぶので、三千子は帰ることも出来なかつた。

そうかと言って、小さい三千子は、慰める術も知らず、ちよこなんと椅子に坐つて、艶のない克子の寝顔を見ると、なんだか

自分が泣き出してしまひそう——。

夕飯前に、克子のお母さまが病院へ戻つてくれた。

翌る朝、早く三千子が見舞に行くくと、克子は案外元気な顔色だった。

「お人形とお花。」

「あら、ありがとう。ちよっと見せて。」

と、克子は三千子の手から、小さい花籠を受け取って、

「まあ、可愛いわね。ドライフラワー？」

「ええ、克子さんの治るまで、花も凋まないように——。」

「永久花ね。」

と、克子はうなずいて、清らかに微笑んだ。

「あたしね、いろんなこと、ずいぶん反省しちゃった。……御免なさいね。三千子さん。」

三千子はあわてて、真赤になった。

「そんなこと、どうして？」

「どうしてって？ 三千子さん、よく分ってるでしょう。私、ずいぶん我が儘だったんですもの。」

⑧ 病気のために、克子の気が折れたのかとも、三千子は思ったけれど、克子の声には、いつもとちがう、深い響きがあった。

「私ね、私なら——もしも、洋子さんが、私のようにお怪我なさらしたら、いい気味だと思ったかも知れないわ。それなのに、洋子さんは、親切に看下さって、直ぐ三千子さんを選んでくれたり……。私なら、三千子さんには、わざと報せないかもしれないのに……。」

「そんな話、だめよ、御病気なのに。」

と、三千子は克子の口を抑えそうに、手を出した。

あまりほんとうのことを打ち明けられるのは、なんだか怖い。

克子の洋子に対する気持ちだが、温く溶けたのは、ぞくぞく E けれど、これ以上聞くのは、なんだか F 。

三千子の方が、きまり悪くて、まごついてしまった。
強い克子は、こんな時にも、凛々しく立派に、自分の悪いところを、すっかり発いて見せようとする。
強いというのは、自分を鞭打つのも強く、これこそ真実の強さと云えるのだろう。

三千子は、やっぱり克子を、「えらいなあ、えらいなあ。」と、思い返すのだった。

「私ね、洋子さんにお詫びしたいの。自分でよく知っていながら、洋子さんに、とても悪いことばかりしてたんですもの。許して下さいませんかしら。」

「ええ、お喜びになりますわ。克子さんを悪く思ってたなら、昨日だって、あんなに、お姉さま……。」

三千子は、はつと言葉を切った。克子の前で、洋子を「お姉さま」と呼んで、克子が気を悪くしないか。そう呼びなれているので、つい口に出してしまったけれど……。

「いいじゃないの。三千子さんのお姉さまなんですもの。私だって、お姉さまと呼びたいくらいよ。もし洋子さんが、呼ばせて下さるなら。」

と、克子は眼を綺麗に光らせて、

「洋子さんと三千子さんとの間が、私分らないことはなかったのよ。それなのに……。」

「お姉さまを呼んで来ますわ。」

と、三千子はじつとしていらなくて、廊下を小躍りするように……。

運動会の後片づけで、三年以上は登校、一二年はお休みだった。

病院の前から電車に乗って、三千子が学校に着いた時には、もう大方整顿されて、昨日の装飾に使った、小旗や、色とりどりのモールや、造花や、聖堂の鐘をかたどった鈴割りなども、近くの孤児院へ、例年通り贈るために、一纏めに束ねてある。

その傍^{そば}を通^{とほ}つて、三千子が洋子^{ようし}を捜^{さが}しに行く^いくと、五年^{ごねん}のひとが、モップでせつせと階段^{かいたい}をこす^こっていた。
マダムが剪^きり花^{はな}を抱^{かか}えて、私室^{しつしつ}へ入^いつてゆ^ゆかれる。

三千子は五年^{ごねん}のひとに、遠慮^{えんりょ}しいしい尋^{たず}ねた。

「G」
「H」

そのひとも、昨日^{けふ}の赤十字班^{せきじゅうじばん}の一人^{ひとり}だった。

「I」
「J」

と言^いいながら、そのひとは自分^{おれ}が先^{さき}に立^たつて、洋子^{ようし}を呼^よびに行^いつてくれた。

前掛^{まへか}けをつけた洋子^{ようし}が、訝^{いぶか}しそうに出^いて来た^き。三千子は黙^{だま}つて、人影^{ひとかげ}のない廊下^{ろうか}へ、洋子^{ようし}を誘^まうと、

「お姉^{あね}さま。——とつても、とても、いいお話^{おはなし}。」

「なによ。」

「あのね、克子^{かつこ}さんが、お姉^{あね}さまにお詫^わびしたい^いんですつて。」

「まあ！」

と、洋子^{ようし}は濃^こい色^{いろ}の眼^めを、びつくりした^{した}ように見開^{みひら}いて、却^{かえ}つてぼんやり突^つ立^たっていたが、もう長い睫^{まつげ}毛^げが、ぱちぱちと顫^{ふる}えて来た^き。

「昨日^{けふ}のことをとても感謝^{かんしゃ}して……。御自分^{ごじぶん}がわがままだ^だつたつて、お姉^{あね}さまが堪忍^{かんにん}して下さ^{くだ}るか、心配^{しんぱい}してらっしやるの。会^あいた
いって……。それで、お迎^{むか}えに来^きたの。」

「三千子^{さんち}さん、よかつたわ。ありがとうよ。」

と、やっと、それだけ言った。そして洋子は、ただ幾度も瞬きながら、だんだん下を向いた。

三千子も、今はもう、うれしいという以上に、なにか悲しいほど、高まった気持ちだった。

言葉もなく、二人は、大きな塊りに溶け合うような、熱い思いに流されて……。

三千子が洋子から初めて手紙を渡された、この廊下で、二人はまた手を取り合って……。

⑨ 運動会の日まで、そむき合った小さい乙女心、奪い合った一つの花びら、傷つけ合った愛情、そういう鬱陶しい幾月かを越えて、今日は、綺麗に掃除したように、晴れた日。

「もう、済みましたよオ。」

と、誰かが叫んでいる。

前掛けを外した生徒達が、楽しそうに校庭へ出て行く。

【問1】

——①「手間取る」、②「気がもめる」、③「腹をよじって」とありますが、(1)「手間取る」、(2)「気がもめる」、

(3)「腹をよじる」の意味として適当なものを次の中から選び、(ア)～(キ)の記号で答えなさい。

(ア) おかしくてたまらないさま。

(イ) 笑いたいのをがまんすること。

(ウ) 緊張して、心にゆとりがないさま。

(エ) 争いが起きて、ごたごたすること。

(オ) もどかしくて、いらいらすること。

(カ) 自分の力では、どうにもならないさま。

(キ) 思ったより時間や労力を必要とすること。

【問2】

——④「わが子の姿を目で追いながら、お互いに、よその子供の、褒めつこの競争をしている」とありますが、どうい
うことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) 自分の子どものことはそっちのけで、年に数度しか顔を合わせない母親同士、たがいに相手の子どもの活躍に熱い
声援を送りながら、おしゃべりに花を咲かせている、ということ。

(イ) 自分の子どもが競争を終えて、生徒席の方へ引き上げていくのを見送った母親たちは、今度は母親同士で、たがい
に相手の子どもを優秀だとおだて合う競争を始めた、ということ。

(ウ) 自分の子どもから目が離せない母親たちではあるが、近くににいる者同士、たがいに相手の子どものことを持ち上
げ、相手をおだてるといふ社交辞令も忘れてはいない、ということ。

(エ) 自分の子どもの出番が終わってしまった母親たちは、わが子を応援する代わりに、名前も知らない生徒が一所懸命
に競争する姿に、せいっぱいの声援を送っている、ということ。

【問3】

⑤「そのあざやかな競走振りに、見ている洋子も胸がすくようで、日頃のこととも忘れ、やはり克子に勝たせたい」とありますが、どういうことですか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

(ア) ふだんは克子とぶつかったり、反目し合ったりする関係だが、今日の自分は赤十字班の一員であるのだから、中立な立場で克子の活躍を応援してあげなければいけない、ということ。

(イ) 克子とは少しギクシャクした関係ではあるが、しなやかに走り、活躍する克子の姿を見ると、何とも清々しい気持ちになり、おのずと克子を応援したくなってくる、ということ。

(ウ) いつもなら克子のことを悪しざまに言う洋子ではあるが、同じ色の組になった克子が、買い物競争で先頭を切って駆けていく姿を見ると、思わず克子を応援したくなる、ということ。

(エ) 克子を自分のライバルとして見ている洋子だからこそ、克子にだけは他の生徒に負けてほしくないと思い、軽やかに走る克子が一等になるよう、克子を応援したくなる、ということ。

【問4】

A

C

に当てはまる語として適当なものを、次の中からそれぞれ選び、(ア)～(オ)の記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないものとします。

(ア) うろうろ

(イ) ばらばら

(ウ) しぶしが

(エ) ぐんぐん

(オ) すれすれ

【問5】——⑥「古い壁かべの隙間すきまから、こおろぎでも飛び出しそう——」とありますが、どのような様子を表していると考えられますか。

次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 運動場から聞こえてくるとよめきが、静まりかえった部屋のわびしげな様子を、よりきわたたせている。
- (イ) 飾りけのない部屋には、生活感のようなものがまったく感じられなくて、なんだか不気味な感じがする。
- (ウ) 古い壁かべにはひび割れがあり、その割れ目からは何かが飛び出てくるように思えて、恐ろしくなってくる。
- (エ) 外は美しく晴れているけれど、部屋の中は一足先に秋が訪れたおとすようで、ひんやりした空気が漂たなよっている。

【問6】——⑦「体の具合が悪いと、なんだか気持ち澄すむわね」とありますが、この時の克子の気持ちはどのようなものだと

考えられますか。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 病気になったことで、三千子が自分を心配してくれるようになり、とてもうれしく思っている。
- (イ) 病気になったことで、神経が研とぎ澄とまされ、他の人の心の中までも見通せるような気がしている。
- (ウ) 病気になったことで、自分の中にある良くない心が、薄うすまり、消えていくような気がしている。
- (エ) 病気になったことで、日頃ひじょうから敵対する洋子の世話になってしまい、それを悔くしいと思っている。

【問7】二つの D には、同じ言葉が入ります。次の中から最も適当なものを選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) 家
- (イ) 犬
- (ウ) 夢
- (エ) 胸

【問8】

⑧ 「病気のために、克子かつこの気が折れたのかとも、三千子は思ったけれど、克子の声には、いつもとちがう、深い響ひびきがあった」とありますが、この時の三千子の思いはどのようなものだと考えられますか。次の説明文を読んで、(1)～(4)について適当なものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ふだんは (1)

- (ア) 強気
(イ) 気弱
(ウ) 温和

な克子が、病気のために (2)

- (エ) 意固地いこちになっている
(オ) 気が弱よわくなっている
(カ) 無愛想むあいそうになっている

のかとも思ったの

だが、そうではなく、克子かつこはこれまでの自分が (3)

- (キ) 向こう見ずむこうみずだったこと
(ク) 正直ちかではなかったこと
(ケ) 手前勝手てまへかちであったこと

を反省し、

今、 (4)

- (コ) その気持ちきもちを素直すなおに打ち明けようとしている
(サ) 三千子みよこへの恋慕れんぼの情なさけを断ち切ろうとしている
(シ) 心ならずも自分の敗北ばいぱくを認めようとしている

のだ、と三千子は感じたのである。

【問9】

E

F

なさい。

に当てはまる言葉として適当なものを次の中からそれぞれ選び、(ア)～(オ)の記号で答え

- (ア) 悲しい (イ) 恐ろしい (ウ) うれしい (エ) 恥ずかしい (オ) ねたましい

【問10】

G

く

J

に当てはまる会話を次の中から選び、(ア)～(エ)の記号で答えなさい。

- (ア) あのう、八木さん、どこに？
(イ) まあ、とんだことね。……八木さんは、二階のお教室だわ、多分。
(ウ) あら、三千子さんなの？ 克子さん、どうなさって、およろしい？
(エ) ええ、今朝はずいぶんお元気でしたけれど、しばらく、学校はお休みらしいんです。

【問11】

⑨「運動会の日まで、そむき合った小さい乙女心、奪い合った一つの花びら、傷つけ合った愛情、そういう鬱陶しい幾月かを越えて、今日は、綺麗に掃除したように、晴れた日」とありますが、これに関する次の説明文を読んで、
 a) () f) に当てはまる言葉を後の (ア) (イ) (ウ) (エ) (オ) より選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を2度以上用いてはいけないものとします。

四月——。新しい年度が始まった時、新入生の大河原三千子を見そめた美しい上級生たちがいます。それが五年生の八木洋子であり、そして四年生の克子でした。「エス」——それは少女同士の親密な友愛のこと。洋子から、そして克子からも、三千子は「エス」の関係を結びましようという誘いの手紙をもらったのです。その後、三千子は洋子と「エス」の関係になり、洋子を「お姉さま」と慕うようになったのでした。

運動会の日——。赤十字班に所属する洋子は、買い物競争で怪我をした克子の介抱をすることになります。そして、克子のことをあれこれと気づかう洋子は、克子と自分との関係において、自分の何が、どういけなかったのかに気づくことになるのです。

三千子という可愛らしい「妹」を得たことで、洋子は a) になっていましたが、それを克子はどう見ていたでしょうか。軽井沢で三千子と一緒にになった克子は、三千子に対して積極的なアプローチを試みたようです。三千子を横取りしてやろうとするかのような、克子の強引な振るまい。——その裏側にあったのは、もちろん三千子に対する

b) だったでしょう。でも、それだけではないはずです。

克子の心の中には、洋子が三千子を「妹」にしたことに対する c) の気持ちもあったに違いありません。また、

三千子を奪い取って、洋子を見返してやりたいという気持ちもあったでしょう。そうした思いが、洋子に対する d) や、いじわるなふるまいとなって現れたのだ——と洋子は理解したのです。そして、克子の気持ちに寄り添って考えることで、洋子は自分自身のあやまちにも気づきます。

洋子の心の中には、三千子を独占できた喜びだけでなく、克子に勝ったという優越感がなかったわけではありません。

そんな洋子の様子や態度は、克子にとっては **e** なものであつたでしょう。洋子に対する **d** や、いじわるなふるまい。克子にそのような態度やふるまいをするようにしむけたのは、自分だつたのだと、洋子は気づき、そしてそのことを **f** するのです。

一方、克子も、洋子から甲斐甲斐しく介護かいごされたことで、自身のわがままを反省し、洋子を見る目が変わっていきます。そして、洋子と克子の側かたにいて、二人の心が解け合うのを感じる三千子。——このお話は、三人の少女の成長物語でもあるのです。

ところで、このお話は、昭和十年代前半の高等女学校を舞台ぶたいとしてしています。この時代、義務教育だつたのは尋常じんじょう小学校の六年間のみで、尋常小学校を終えた女子の進学先として用意されていたのが、高等女学校でした。ですから、高等女学校の一年生である三千子は、現代の中学一年生と同じ年齢ねんれいになるはずです（五年生の洋子は、現代の高校二年生と同じ年齢になるでしょう）。

また、現代の日本では、中学校までが義務教育となつていきますから、小学校を卒業した後は、みんなが中学校に進学します。でも、このお話の時代では、尋常小学校を終えて、高等女学校に進学する女子は、およそ2割でした。その2割とは、経済的に恵めぐまれた家庭に生まれ育つた少女たちであり、高等女学校とは、女子エリートのために用意された進学先だつたと言ふこともできるのです。

- | | | | | | | | | | |
|-----|-----------------------|-----|-----------------------|-----|----|-----|------------------------|-----|----|
| (ア) | 不快 | (イ) | 嫉妬 <small>しつと</small> | (ウ) | 反発 | (エ) | 期待 | (オ) | 得意 |
| (カ) | 愉快 <small>ゆかい</small> | (キ) | 未練 | (ク) | 同情 | (ケ) | 後悔 <small>こうかい</small> | (コ) | 失意 |

【出典】

- Ⅰ 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』（新潮文庫、二〇二二年一月）一六七ページ～一七七ページ
- Ⅱ 川端康成『乙女の港』（実業之日本社文庫、二〇二一年）二五〇ページ～二七一ページ

